

羽村市史編さんだより

平成29年7月

第10号

# 伸びゆくはむら

特集

はむらの縄文時代

2

- 1 News
- 3 部会の手帖
- 5 市史編さんの足あと
- 5 コラム「ちっとんべえ」

**N****e****w****s**

## 市内春祭りの調査を行いました

4月8日（土）・9日（日）に市内春祭りの調査を行いました。

4月8日（土）は、春季例大祭宵宮と羽村駅西口での六社山車曳き合せなどの調査を行いました。

山車の曳き合せは、元々玉川神社と稲荷神社の山車が行っていたものが、徐々に増えていき、東日本大震災をきっかけに、平成24年から六社で行われるようになったそうです。9日（日）の本宮の調査では、雨の中、八雲神社の神輿の川渡御や、各地区の祭礼の特徴や違いについて調べました。

調査結果などについては、平成31年度に刊行予定の資料編や平成33年度に刊行予定の本編の民俗分野の記述に反映していきます。



▲今年の市内春祭りの様子

## 近隣市でも市史編さんを行っています

羽村市では、平成33年度の本編刊行に向けて、平成25年度から市史編さん事業を行っています。市史の編さんを行っているのは、羽村市だけではありません。

現在、東京都の26市中、羽村市以外に6つの市で市史編さんが行われています。市史編さんが行われているのは、八王子市・立川市・府中市・小金井市・狛江市・清瀬市で、いずれも8～11年という長期の計画で調査・刊行が行われています。

市史の編さんは、過去に蓄積された資料や新出資料、また歴史学の分野にとどまらず、自然や民俗など多岐にわたって調査・研究を行い、それらを取りまとめ、先人が築いた歴史を次代に継承する重要な事業です。

自治体によって体裁や冊数はさまざまなので、その違いをしてみるのもおもしろいかもしれません。



▲新八王子市史

## 表紙の写真 多摩川と崖線 ～縄文人の豊かな暮らし～

縄文時代、羽村の地に暮らした人びとは、多摩川では貝や魚の漁を行い川の恵みを、崖線では木の実や野草などを採集して山の恵みを楽しんだことでしょう。

彼らが現在の羽村を見たら、自分たちの生きた時代との違いに驚くことは容易に想像できますが、多摩川や崖線などの自然から受ける豊かな恵みは、今も昔も変わりません。

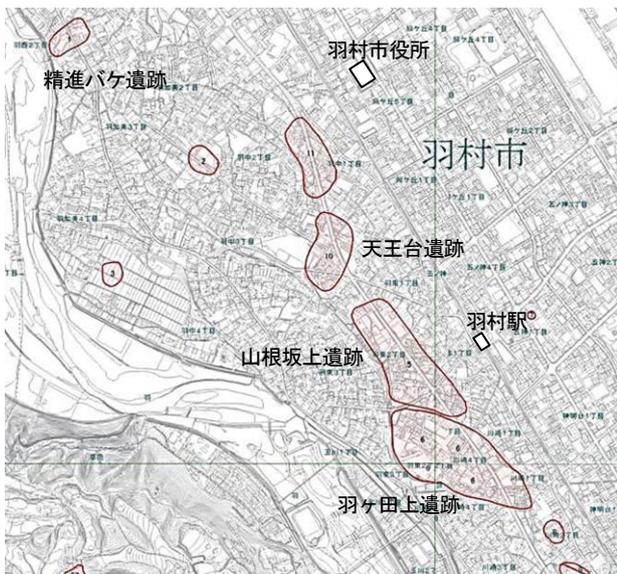


## ●市内の遺跡

市内には、「周知の埋蔵文化財包蔵地」と呼ばれる区域が10ヶ所あります。いわゆる「遺跡」として認識されている場所です。「遺跡」とは、広義の解釈では「人々の生活や行動の痕跡」といえます。ただ、多くの方はそれが「土に埋まった」状態を思い浮かべるでしょう。

多摩地域の多くの遺跡がそうであるように、羽村の遺跡も河岸段丘の崖線沿いに分布しています。羽ヶ田上遺跡、山根坂上遺跡、天王台遺跡、精進バケ遺跡は、羽村を代表する縄文時代の集落遺跡です。集落遺跡とは、過去の発掘調査などで複数の住居跡が見つかった遺跡のことです。

羽村にも、縄文時代から人びとが生活していたことがわかります。



▲市内の遺跡分布（『東京都遺跡地図』加筆修正）

## ●縄文時代とは

縄文時代は、今から約15,000年前から約2,400年前のおよそ13,000年の期間をいいます<sup>(※)</sup>。土器を使用し、弓矢による狩猟が始まり、定住生活が広まっていくのが縄文時代といえます。何よりも食糧事情の変化、とりわけ食物採集経済の発達が大きな要因と考えられています。

あまりに長い時間なので、考古学では古い方から「草創期」「早期」「前期」「中期」「後期」「晩期」と6つの時期に分けています。羽村市の4つの集落遺跡は、いずれも今から約5,000年前から約4,000年前に区分される「中期」の遺跡です。

縄文時代のイメージは、青森県三内丸山遺跡の調査以降大きく変わってきています。自然と共生し、豊かな感性を持った非常に文化的な生活が営まれていたと想像されています。

その中でも、羽村に人々が住んでいた「中期」は、気候も安定して、狩猟採集とはいえ豊富な食料にも恵まれ、縄文文化の爛熟期ともいわれます。山根坂上遺跡からは、華やかに装飾された土器やランプに使ったと考えられる釣手土器、土製の人形や鈴（土偶、土鈴）などが発見されており、当時の人びとの生活の様子に想像が掻き立てられます。

(※：期間については諸説あります。)

## ●『羽村市史』が目指すもの

山根坂上遺跡からはこれまでの調査で60棟以上の住居跡が発見されています。いずれも縄文時代中期の住居跡ですが、すべてが一時期に同時に存在したわけではありません。前述のとおり中期の区分だけでも約1,000年の時間幅があります。『羽村市史』編さん事業では、遺跡発掘調査での土器の出土位置や破片の接合関係などを再検討することで、この時間幅をより短く設定しようと試みています。この試みにより、同じ時期に存在した住居を把握することができ、生活の様子をより細かく再現できると考えています。

遺跡に残された住居跡や土器などが伝えてくれる情報を丹念に読み取っていくことで、羽村の縄文時代を復元することができるのです。



▲発見された住居址と土器（山根坂上遺跡/平成3年）

# 部会の手帖



各部会の活動の様子を紹介します。  
※今号では平成29年4月から6月までの活動をお知らせします。

## 用語の解説

みょうじたいとう  
苗字帯刀…江戸時代、特定の平民が許されて苗字を名のり、刀を差したこと。  
れき死…車両など車輪にひかれて死ぬこと。

### 第1部会 ～原始・古代・中世～

縄文班では、引き続き、羽村の縄文時代をより詳細に復元する編年作成のための、遺物出土状況のデータ整理と遺構のデジタルトレース作業を進めています。

中世班では、国立市での三田氏関連資料調査を行ったほか、これまでに収集した板碑や五輪塔などの石造物の拓本や実測図、古文書史料の調査カードや写真などの整理分析と筆耕作業を進め、「資料編」編集に向けての、具体的な章構成と内容をまとめています。

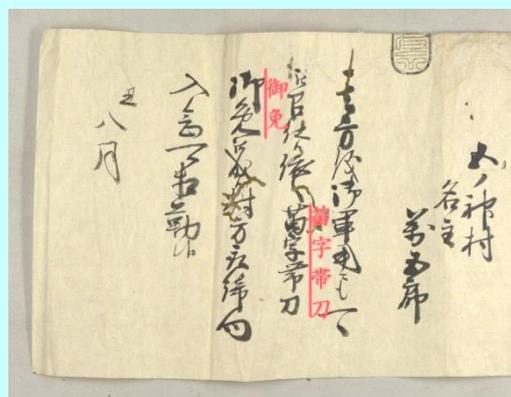


▲平成元年の天王台遺跡調査の様子  
(出典：『羽村町天王台遺跡調査報告』)

### 第2部会 ～近世～

第2部会では、引き続き平成30年度の資料編刊行に向けた作業を行っています。市内旧家の調査では、新出史料の整理を行いながら資料編掲載候補を選定し、データ化に向けた作業を進めています。

今回の調査では、旧家の歴史や家業について知ることのできる「苗字帯刀」を許可した免許状や、酒造業を始めるための鑑札（許可証）の発行を求めるものなど、さまざまな史料が確認できました。



▲苗字帯刀を許可した領主からの通知

## 第3部会 ～近代・現代～

第3部会では、『羽村市史 資料編 近現代図録』の刊行に向けた作業を進めています。これまで整理・収集してきた写真をもとに、写真に写っている人や物、その背景、撮影時期を考慮しながら、写真の選定と原稿執筆を進めています。

またこれらの作業と並行しながら、聞き取り調査も進めています。羽村の青年団（会）や羽村の選挙に関する聞き取りでは、戦後の混乱期から現在に至る羽村の変化や人びとの暮らしの一端をうかがい知ることができました。



▲資料整理の様子

## 第4部会 ～自然～

地形・地質班では、市内および近隣市町村の礫層調査を続けています。現地では、礫の種類・形状の記録、サイズの測定などを行っています。

気候班は、現在の気象観測だけでなく、旧家の農業・養蚕日誌から過去の天気などの情報も収集しています。

生態班は、タヌキやハクビシンなどの“れき死体”に関するデータの収集を行い、市内で回収された野生動物の情報収集を行っています。



▲ルーペを使い礫を観察している様子

## 第5部会 ～民俗～

4月8日（土）の春季例大祭宵宮と羽村駅西口での六社山車曳き合せでは、各神社の行事の様子や、八雲神社の人形山車のほか各神社の山車の様子と各保存会のおはやしなどを確認することができました。翌日の本宮は、あいにくの天候により、一部の調査を断念しましたが、八雲神社神輿の川渡御など、羽村の祭礼に関する貴重な行事を確認することができました。

また、市内に残されている豚舎について、現地調査を行いました。



▲八雲神社神輿の川渡御の様子



月	日	できごと
4月	4日(火)	③ 聞き取り調査(個人宅)
	7日(金)	③⑤ 聞き取り調査(個人)
	8日(土)	⑤ 春季例大祭宵宮等調査 ⑤ 六社山車曳き合せ調査
	9日(日)	⑤ 春季例大祭本宮調査
	12日(水)	④ 礫層調査(市内・青梅市)
	15日(土)	羽村市史編さんだより 第9号発行
	26日(水)	④ 市内礫層調査

月	日	できごと
5月	6日(土)	⑤ 旧豚舎調査(個人宅)
	17日(水)	④ 市内礫層調査
	29日(月)	④ 市内礫層調査
6月	7日(水)	④ 礫層調査(市内・青梅市)
	15日(木)	① 三田氏関係文書資料調査 (国立市)
	28日(水)	② 市外史料調査(東村山市)
	30日(金)	④ 気温観測データ(定点)の回収

## コラム

# ちっとんべえ

## 第10回 「江戸のお薬事情」

現在、体調不良の時に病院へ行くことはごく一般的なことです。江戸時代、医者にかかることは今ほど容易ではありません。しかし、当時はしばしば飢饉が起こり、それに伴って「時疫(流行病)」が発生したり、普段は食べない怪しげなキノコや魚、野草などを食べて食あたりになってしまうことは珍しくありませんでした。

では、当時の人びとはこのような事態をどうやって乗り越えていたのでしょうか。今回紹介する市内旧家所蔵の史料は、時疫・食あたりの対策として領主から村へ出されたものです。

### 時疫の場合

(本文)：時疫にハ牛蒡をつきくたき、汁をしほり、茶碗半分ツツ二度飯(飲)て…

(内容)：茶碗半分のゴボウの搾り汁を2回服用。

### 食あたりの場合

(本文)：一切の食物にあたり煩に、大つふなる黒大豆を水にてせんし、幾度も用てよし、魚にあたりたるにハイよいよ吉

(内容)：大粒の黒大豆を水に煎じて飲む。特に魚の食あたりには効果が高い。

江戸時代、時疫に効くとされた「ゴボウの搾り汁」が、どんなものなのか作ってみました。ゴボウ1本を細かく切り、茶碗1杯の水に入れて揉み込むこと20分。完成した汁を半分飲むと、口の中に「ゴボウ本来の味わい」が広がり、飲んだことを後悔するのに時間は必要ありませんでした。

ただ、飲み終えた後には何となく「体調が良くなった」気がするの不思議なものです。ともあれこの史料には、そのほかにも時疫・食あたりに関する対処法が記されており、当時の人びとが体調不良の際に症状にあった対応をとっていたことが想像されます。

※これは古文書に記されたものであり、実際の効果を保証するものではありません。(S.Y記)

▶ 搾り汁が作ったゴボウの



※「ちっとんべえ」とは、羽村の昔ことばで「ちょっと、少しばかり」という意味です。